



開成町と富士山

(その3)

富士山が世界文化遺産に登録されたことに合わせて、「開成町と富士山」シリーズを連載しています。おたのしみください。

問 教育総務課 ☎82-5221

町内のふじ道



ふじ道とは、富士山に参詣する人たちがよく通った道のことです、地元の人たちがそう呼び習わしたものです。

江戸時代、富士山の登山ルートはすでに4本ほどあって、町内の信者たち、特に吉田島、牛島、宮台の人たちは矢倉沢往還(街道)を通り関本へ出て、矢倉沢、足柄峠を越えて御殿場へと歩いて行きました。道すがら遠くにそびえる富士山を眺めながら、さぞ胸をときめかせたことでしょう。

また、山北方面から足柄峠を越えないで富士山に向う「ふじ道」もありました。その場合は酒田村を北上し、金井島や大口あたりの浅瀬で酒匂川を横切り、岸、川村、谷峨を通り、さらに駿河小山、山中湖に出て、富士吉田口から登りました。

先達(富士山の案内人、指導者)によっては、途中で参拝する神社や、宿泊する宿もいろいろありました。



矢倉沢街道(ふじ道)
宮台から竹松方面をのぞむ

なお、明治の初め頃から各地で鉄道が敷かれ始め、山北―駿河小山間の難工事が終わった明治22年頃から、東海道線(当時)の松田駅から汽車に乗って御殿場駅まで行き、御殿場口や須走口から登る人たちが多くなりました。

(文化財保護委員会)

久保田 和男

*文芸

開成俳句会

五月吟

ともしび短歌会

短歌

四月詠

雛の手に委ねし余生草むしる
模様替へ時間掛かりし夕薄暑
さりげなく人離れゆく桐の花
夕薄暑空に響かせ鉦打てり
暮れ初むる風に解れし若楓
独り居の姉思ひある薄暑かな
街薄暑病院出でて深息す
若楓僧侶回廊軋ませて
川風に心静まる夕薄暑
畦川の魚影の太る薄暑かな

波多野すみ枝
有賀 孝子
遠藤まつ子
瀬戸 悦子
下澤 操子
奥津らわき
遠藤マツエ
遠藤シヅ子
濱本 主雄
新井たか志

鳶職の転寝誘なふ薄暑かな
薄暑とは立夏を迎える頃、少し暑さを感じる気候の事で俳句の上品な言葉でもある。
懸命に働いている(鳶の職人さん)は、汗を流している。作者はその仕事振りを見て、疲れを癒す為に横になりたいであろうと、職人さんの気持ちと重なっているのである。

新井たか志 選

遠藤美津子

瀬戸屋敷の茅葺保持にいろり火を
守る嬬にあつく敬意す
歴史的建造物の保持には、「縁の下の方力持ち」で支えて下さる方がおられる。瀬戸屋敷も同様で、嬬の方のご尽力があればこそと、改めて実感し、敬意の念を強く持ったという。郷土愛に基づく一首。

近藤 正臣 選

府川ハツエ

青春の夢育みし沼津の浜
思ひ深きは牧水の歌碑
多感な青春時代、誰もが思い出深い場所をもつ。作者は、歌人で敬愛する牧水の歌碑のある沼津の浜辺を、学友と散策し、人生論を戦わせたことが思い出され、好きな場所であったと述懐している。
※牧水の歌碑 若山牧水の「幾山河……けふも旅ゆく」の歌で有名な歌碑。昭和四年に千本浜公園内に建立された。

石井はま江

雪を積む山を従へ立つ富士に
抗ふがごとく風雲の湧く
他の山を従え、圧倒する雄峰な富士山。その景観を一変させるような風雲が湧くのを眺めという。何気ない描写だが、「四句目」の表現によって、一般的な富士山の景観の見方に、石を投じた詠歌。

諸星 末子